

近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に (IV)

その4 唱歌について

保延 成子・三角 同・橋口 英俊

(昭和58年9月30日受理)

The Content Analysis of Human-Esteem and Achievement Motive in the Modern Textbook (IV) The Textbook of Music.

Shigeko HONOBÉ, Hitoshi MISUMI, and Hidetoshi HASHIGUCHI

(Received September 30, 1983)

はじめに

本研究の究極の目的は、主として学校教育の人格形成における意義をできるだけ実証的に明らかにし、教育基本法にいう「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間」の育成はいかにあるべきかを具体的に提示することにある。ことばをかえれば、人間の尊厳という信念にもとづいて自他の人格・生命をともに尊重するという人間尊重の精神を基盤にすべての人々が幸せに生きるための教育とは何か、世界の人々が平和に手をつなぎ合いながら生きていくこととは何かということを追究することである。つまり、それを教科書をとおり、可能な範囲で実証的に明らかにしようとするところにさしあたったのわれわれの究極の目標がある。

これまでわれわれは、明治の学制発布以降の小学校教科書を各教科ごとに生命尊重と達成動機を中心に内容分析し、さまざまな角度からの検討を試みてきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。本研究はその一環をなすものであり、今回は教科の性質上主として児童の情緒的側面に著しい影響を及ぼす可能性があると思われる「音楽」についてとりあげる。

すなわち「音楽」の特徴は、歌詞の内容がしらすらすのうちに曲を通じ、感情にうったえられ根づいていくところにある。それが、他教科と大きく異なるところであり、それが何かの目的のために手段として使われたとき、人が人として生きる原点である人間性をも根底からゆさぶる影響をもつかもつかもされない。

ここでは、明治5年に学制が発布されて以後の音楽教育の変遷をおおざっぱに概観し、主として明治44年の国定教科書から昭和22年の国定Ⅳ期教科書までをこれまで

行なった他教科書の例に準じ、生命尊重と達成動機という視点を中心に内容分析することを当面の課題とする。

方 法

1. 国語・修身・理科の場合と同様に、唐沢(1967)⁵⁾や海後(1969)⁶⁾を参考にして、音楽教科書の国定期を次の4期に分類する。

- (1) 国定Ⅰ期教科書時代(明治44年~昭和6年)
- (2) 国定Ⅱ期教科書時代(昭和7年~15年)
- (3) 国定Ⅲ期教科書時代(昭和16年~20年)
- (4) 国定Ⅳ期教科書時代(昭和22年~26年)

2. 分析に用いたのは「日本教科書大系(近代編)」(全27巻、講談社発行、1964)である。これには、明治初年からの小学校教科書の中で広く使用され、その時代の教材を代表すると思われるものの原典が復刻されている。また明治37年以降の国定教科書はすべて収録されている。このうち今回の報告に使用したのは、唱歌(25巻)である。

3. 国定Ⅰ期以前の検定教科書については、日本教科書大系に収録されているものについて検討するにとどめる。

4. 国定Ⅰ期からⅣ期までのすべての小学校教科書を対象とする。具体的には、各期各学年各曲目ごとに、その内容を中心として以下のような分析作業を行なう。

(1) 生命尊重についての評定；ここでいう生命尊重とは人間尊重とはほぼ同義で、人間の尊厳という信念にもとづいて、自他の人格・生命をともに尊重するという精神が内容的にどの程度もりこまれているかによって、次の5段階に評定する。

L + 2；生命尊重の精神が特に顕著に認められる。

表 1

名 称	内 容
N(国家主義)	忠君愛国・国威発揚など国家主義的なもの
M(ミリタリズム)	軍事・戦争美化など軍国調のもの
E(教訓的内容)	道徳的教材・忠義・孝行など
S(季節・自然・年中行事)	自然の風物・地理・季節の行事など
I(生活・勤労・学校)	生活・勤労・学校・政治・法律・経済など
P(遊び・スポーツ)	レクリエーション・スポーツ・衛生も含む
H(歴史的内容)	歴史・伝記など
C(科学的内容)	物理・化学・生物など科学的内容のもの
T(文化的内容)	物語・劇・童話などの文学作品
U(分類不明)	上記のいずれにも含まれないもの

L + 1 ; 生命尊重の精神が認められる.

L 0 ; いずれともいえない.

L - 1 ; 生命尊重に反する内容が認められる.

L - 2 ; 生命尊重に反する内容が特に顕著に認められる.

(2) 達成動機についての評定 ; その曲目の内容あるいは記述に、達成動機的なものがどの程度含まれているかを次の3段階に評定する. ここでいう達成動機とは、基本的に McClelland, D. C. らのいわゆる「困難なことをうまくなし遂げたい、競争場面で人よりすぐれたというような何らかの価値的目標に対して、自己の力を発揮し、障害に打ち克ち、できるだけよく目標を達成しようとする動機」をさす⁷⁾.

A + 2 ; 達成動機が特に顕著に認められる.

A + 1 ; 達成動機が認められる.

A 0 ; 達成動機とは特に関係ない.

(3) 内容による分類 ; 先に筆者ら⁸⁾は、各期ごとの比較や他の教科あるいは他の研究との比較が可能のように、唐沢の分類を参考にして、次にあげる10カテゴリー(表1)を設定した. ここでも、それにしたがって各期、各学年の音楽教科書を各曲目ごとに分類し、分析する. また、分類に際して重複を許し、特定の内容にむりに分類することは避けた.

結果及び考察

ここでは、先に述べた趣旨にもとづき、音楽教科書について分析した結果を中心に考察する.

1. 国定教科書に至るまでの概観

ここでは、学制発布から国定教科書に至る音楽教科書のあゆみについて概観する.

明治5年の学制発布当時、教科書として15科目⁹⁾が指示され、音楽以外では、翻訳的ではあったが、すでに教科書が作成されていた. しかるに、音楽については唱歌「当分之を欠く」(「小学教則」第27条)として、小学校には唱歌、中学校には奏楽を課するというだけであった. その背景には封建時代から音楽に対して、一般に理解が乏しく、むしろ軽蔑する気風さえみられていたことなどが指摘されている¹⁰⁾.

「日本には古来雅楽という日本音楽の専門教育はあったが、普通の武士の教育にはそれはなく、近世以後において箏・三味線が主として女子の遊芸として行なわれていた. しかもそれは手本とか教科書によって学ぶのではなく、耳から耳への直伝、模倣の形態をとっていた. つまり、このような伝統にあって音楽の発達はとどまれ、学制は布かれても西洋音楽を学校教育に摂取することなどは、まったく無視されてきたのである」¹¹⁾.

つまり、このようなことから他教科に比べ、音楽教科書の成立は大幅におくれ、9年後の明治14年にはじめて

文部省音楽取調掛によって編纂され「小学唱歌集」初編として出版されている。次いで明治16年に第2編、17年に第3編が出版されている。なお、この「小学唱歌集」は和洋折衷を基本方針とし、明治40年代の文部省唱歌が出されるまで、小学生のほとんど全員にわたっていたことが明らかにされている¹²³。

以下その間の経緯を要約して述べることにする。

明治6年に東京師範学校が開設されたが、当時の「小学読本」巻1第3回（第3課）には笛の名として喇叭があげられており、洋楽輸入当初の状況を知ることで興味深いものがある。

明治7年に師範学校校長伊澤修二は「蝶々」などの唱歌を作って教えているが、これがわが国の学校教育における唱歌教材の最初とされている¹²⁴。

当時、師範学校ではその事業の一環として幼い子供を集めて遊戯や唱歌を教えるなど、今日でいう幼稚園に似た仕事をしていた。

この頃文部省には米人マレー（D. Murray）が監督として在職し、そして伊澤の唱歌や遊戯を見て大いに感服し、それが契機となって明治8年に彼は音楽教育の研究を目的としてアメリカに留学することになった。

その間明治9年、東京師範学校に幼稚園が正式に開設され、保育科目の細目に「唱歌」が設けられた。

明治11年、文部省より出された「幼稚園保姆練習科規則」の中に「音楽唱歌」が学科として、はっきり記載されている。

しかし、現実には教科として設置されはしたものの実施にまでは至らなかった。その理由として次のようにべられている。「唱歌ヲ実施スルノ難キニ非ズンテ却テ適當ナル音楽ヲ選択スルノ難キニアルモノ」¹⁴⁵

同明治11年に伊澤修二が帰国した。彼は、東京師範学校に勤めるかたわら、音楽取調掛設置に努力し翌12年には文部省に「音楽伝習所設置案」を提出している。

同年9月に学制が廃止され、代わって教育令が出されている。

13年にそれが改正され翌年に至り、小学校教則綱領が発表された。すなわち、ここではじめて小学校初等科、中等科、高等科に唱歌が取り入れることになり、前に述べたわが国最初の音楽教科書「小学唱歌集初編」が発行されたのである。

また、この間明治13年に文部省は米国からメーソン（L. W. Mason）を呼び、日本で取調掛の仕事に携わる

ことになった。そして、わが国の音楽はいずれも唱歌教育の教材としては不適当で、西洋音楽の導入が不可欠であること、その理由としては、「音楽詩誦ハ固人情ノ自然ニ出ズル事故其大体ヨリ之レヲ音楽ノ如キモ我ニ適応スベキモノ有……」と「西洋ノ楽ハ源ヲ希臘ノ哲人ピサゴラス以来数千年間ノ研究ニヨリ東洋音楽ノ及ブ所ニ非ズ……」があげられ、同時に「将来、国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スル事」つまり「師範学校の唱歌教師の養成」ということが取調掛の当面の目標とされたのである¹⁵²。

さて、明治24年には文部省により「祝日大祭日儀式規程」が設置された。たとえば、紀元節、天長節、元始祭、神嘗祭及び新嘗祭の日には学校長、教員及び生徒一同全員が参集して儀式を行なう。その際、祝日大祭日にふさわしい唱歌を合唱することなどが定められたのである。

そして、明治25年を境に、音楽教科書や唱歌集などの数が急激に増加し、これに軍歌が加わり唱歌、軍歌が入り乱れてうたわれるようになり、教育上の問題が起こってきた。

その後の国定教科書の過程について澤崎ら¹⁶²は次のように述べている。

「1894年6月1日の衆議院では、「帝国普通教育の主義並に其教科書検定の方針に関する質問書」が提出され、1896年2月には、貴族院で「国費を以て小学校修身教科用図書を編纂するの建議案」が提出され、国定化へ向けての機運が盛り上ってきた。さらに、1900（明治33）年4月に文部省は、加藤弘之を委員長とした修身教科書調査委員会を設け、翌年3月21日の第15回帝国議会の衆議院では、修身科のみでなく、全教科にわたる国費による教科書の編纂を建議している。

このようにして、国定化への土壌は形成され、教科書国定制は決定的なものとなっていった。このような時、かねてからとかく問題とされていた検定教科書採決に関する醜聞が、一挙に表面化した。それは、一大疑獄事件となり知事・県会議員をはじめ、多数の教育関係者が検挙された。そこで政府は、この事件を契機として、教科書国定化をねらいとした小学校令改正案を閣議および枢密院に提出した。1903（明治36）年4月、小学校令は改正され「小学校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルヘシ」と規定された。ここに小学校教科書の国定制度は確立するのである。

国定教科書の使用は、翌年の4月から始まり、まず、国語読本、書き方手本、修身、日本歴史、地理が使用さ

表2 各期学年別・生命尊重頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	得点	総課数	得点比
		I	L+2	0	0	0	0	0	0	0	0
L+1	0		0	1	0	0	0	1	1	121	0.8
計	0		0	1	0	0	0	1	1	121	0.8
得点	0		0	1	0	0	0	1			
課数	20		20	20	20	22	19	121			
得点比	0		0	5.0	0	0	0	0.8			
II	L+2	0	0	0	0	0	0	0	0	163	0
	L+1	0	0	0	1	0	0	1	1	163	1.6
	計	0	0	0	1	0	0	1	1	163	0.6
	得点	0	0	0	1	0	0	1			
	課数	27	27	27	28	27	27	163			
	得点比	0	0	0	3.6	0	0	0.6			
III	L+2	0	0	0	0	0	0	0	0	151	0
	L+1	0	0	0	1	0	0	1	1	151	0.7
	計	0	0	0	1	0	0	1	1	151	0.7
	得点	0	0	0	1	0	0	1			
	課数	21	22	26	26	29	27	151			
	得点比	0	0	0	3.8	0	0	0.7			
IV	L+2	0	0	0	0	0	0	0	0	132	0
	L+1	0	0	1	0	0	1	2	2	132	1.5
	計	0	0	1	0	0	1	2	2	132	1.5
	得点	0	0	1	0	0	1	2			
	課数	22	22	22	22	22	22	132			
	得点比	0	0	4.5	0	0	4.5	1.5			

れた。続いて1905年4月からは、算術、図画の教科書が使用され、1910年4月から理科が加わった。しかし、唱歌は国定教科書とはならなかった。

このような状況において、唱歌の教科書は検定を受けた唱歌集を使用していた。この検定済唱歌集には、国定制度以前に出版されたものと、以後に出版された両方のものがあった。

文部省は、これら一連の唱歌集に対して国としての標準的な教科書編纂を考えた。それは、1907（明治40）年の小学校令改正で、尋常小学校が6年の義務制となり、（唱歌科）がほとんど必須科目として扱われるようになったこと、さらに当時、唱歌教科書の一般的形となっていた他教科との関連をもった唱歌集の模範を作ることであった。このような考えに立って、まず手始めに「尋常小学読本」の韻文に旋律をつけた「尋常小学読本唱歌」

を編纂し、続いて各学年毎の「尋常小学唱歌」を完成していった。

つまりこの「尋常小学唱歌」が次節で述べる国定I期音楽教科書の誕生である。すなわち明治44年5月に1年生用が、以下2年生用3年生用と順次発行され、大正3年6月の6年生用の教科書で完成することになる¹⁷⁾。

このへんの詳細については前述の澤崎らに詳しい。なお国定I期教科書は昭和6年まで使用され、以後、戦後の昭和22年まで3回改定されている。以下の分析は、これらを対象に行なったものである。

2. 国定教科書の分析

国定I期からIV期までのすべての小学校音楽教科書について、生命尊重(L)達成動機(A)という観点から分析し、さらに内容、ジャンルごとの検討を行なう。

(1) 全体的特徴

表3 各期学年別・非生命尊重頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	得点	総課数	得点比
I	L-2	1	0	0	3	2	2	8	16	121	13.0
	L-1	0	2	3	2	4	1	12	12	121	9.9
	計	1	2	3	5	6	3	14	28	121	23.1
	得点	2	2	3	8	8	5	28			1
	課数	20	20	20	20	22	19	121			
	得点比	10.0	10.0	15.0	40.0	36.4	26.3	23.1			
II	L-2	1	0	0	3	2	2	8	16	163	9.8
	L-1	0	0	3	1	3	1	8	8	163	4.9
	計	1	0	3	4	5	3	16	24	163	14.7
	得点	2	0	3	7	7	5	24			
	課数	27	27	27	28	27	27	163			
	得点比	7.4	0	11.1	25.0	25.9	18.5	14.7			
III	L-2	0	0	3	4	7	2	16	32	151	21.2
	L-1	1	2	2	3	1	3	12	12	151	7.9
	計	1	2	5	7	8	5	28	44	151	29.1
	得点	1	2	8	11	15	7	44			
	課数	21	22	26	26	29	27	151			
	得点比	4.8	9.1	30.8	42.3	51.7	25.9	29.1			
IV	L-2	0	0	0	0	0	0	0	0	132	0
	L-1	0	0	1	0	0	1	2	2	132	1.5
	計	0	0	1	0	0	1	2	2	132	1.5
	得点	0	0	1	0	0	1	2			
	課数	22	22	22	22	22	22	132			
	得点比	0	0	4.5	0	0	4.5	1.5			

表2は生命尊重(L+)について各期学年ごとの頻度および比率を示したものである。同様に表3は非生命尊重(L-)について、表4は達成動機(A)についてそれぞれ各期学年ごとの頻度および比率を示したものである。

また、表5はL+, L-, Aをそれぞれ得点化し、それを得点比にあらわしたものである。なお、得点はたとえばL+得点の場合、L+1, L+2をそれぞれ1, 2点として合計したもので、他の場合も同様である。また、得点比は3者の内容を明確化する目的でそれぞれの得点を各期の曲数で割り、100を掛けたものである。

図1, 2は、それらを図示したものであるが、これらの表や図を参考に以下各期の生命尊重、達成動機の全体的な特徴について概観してみる。

これらを一瞥して気づくことは、①全体を通じ、各期とも達成動機(A)が他の非生命尊重(L-)や生命尊重(L+)のいずれの数値より高いこと。②次に高いのは非生命尊重(L-)であるが、達成動機、非生命尊重のいずれもⅢ期で頂点に達しⅣ期で激減するなど得点、得点比ともかなり類似した曲線を描いていること。③それに対し、生命尊重(L+)は全期を通じきわめて低く、Ⅳ期に至り、若干上向き程度にすぎないことなどである。これらの傾向は、われわれが先に報告した他教科ともほぼ共通する特徴であり、その限りでは、そこで考察したことが音楽においてもそのままではままとみてよいように思われる(図1, 図2)。

しかしながらこまかくみると、他教科にみられない傾向のあることもたしかである。

表4 各期学年別・達成動機頻度

期	学年	1	2	3	4	5	6	計	得点	総課数	得点比
		I	A+2	2	4	0	5	4	3	18	36
A+1	0		2	4	4	10	3	23	23	121	19.0
計	2		6	4	9	14	6	41	59	121	48.8
得点	4		10	4	14	18	9	59			
課数	20		20	20	20	22	19	121			
得点比	20.0		50.0	20.0	70.0	81.8	47.4	48.8			
II	A+2	2	2	0	4	3	4	15	30	163	18.4
	A+1	3	5	4	7	10	5	34	34	163	20.8
	計	5	7	4	11	13	9	49	64	163	39.3
	得点	7	9	4	15	16	13	64			
	課数	27	27	27	27	28	27	163			
	得点比	25.9	33.3	14.8	55.6	57.1	48.1	39.3			
III	A+2	1	3	3	4	4	5	20	40	151	26.5
	A+1	5	7	9	8	7	7	43	43	151	15.2
	計	6	10	12	12	11	12	63	83	151	55.0
	得点	7	13	15	16	15	17	83			
	課数	21	22	26	26	29	27	151			
	得点比	33.3	59.1	57.7	61.5	51.7	63.0	55.0			
IV	A+2	0	0	0	4	0	3	14	28	132	10.6
	A+1	3	1	2	2	3	2	13	13	132	9.8
	計	3	1	2	6	3	5	27	41	132	20.5
	得点	3	1	2	10	3	8	41			
	課数	22	22	22	22	22	22	132			
	得点比	13.6	4.5	9.1	45.5	13.6	36.4	20.5			

表5 各期別得点比 $(\frac{\text{得点}}{\text{回数}} \times 100)$

期	I	II	III	IV	計
L+	0.8	0.6	0.7	1.5	0.9
L-	23.1	14.7	29.1	1.5	17.3
A	48.8	39.3	55.0	20.5	43.6

すなわち、他教科ではAとL-に関しては、概ねI期II期(音楽のI期に相当)の順で高くなり、III期(音楽ではなし)で一時停滞し、IV期V期(音楽のII期III期に相当)で逆に今後は加速度的に急上昇し、そのまま頂点に達するというのが一般的であった。しかるに、特に得点比においては、A、L-ともに音楽では上昇するはずのII期でむしろI期に比べかなりの減少をしている。

また、得点比で各期ともA、L-いずれもかなり高く、たとえばI期からIII期までを国語と比べると、約2倍前後の値を示し、むしろ修身にほぼ匹敵することがわかる(図3、図4)。

音楽教科書の国定化に際しては、教科そのもののもつ特異性をさえぎり国の意志や歴史の流れがより情緒的な面において影響しやすいことは先に述べた通りであるが、国定化後もかなりその傾向をもつことが指摘されている。

生命尊重(L+)の得点では各期ともほとんど同じで変化はみられない。しかし、わずかではあるがIV期(S. 22~26)が高くなっている。

非生命尊重(L-)では、III期(S. 16~20)が断然1位となり、以下I期(M. 44~S. 6)、II期(S. 7~15)、IV期(S. 22~26)となっている。

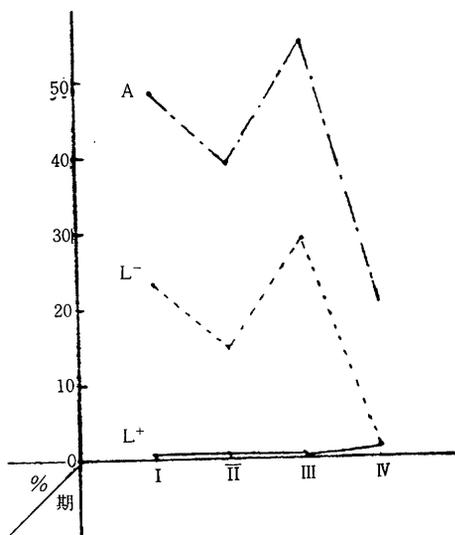


図1 各期別A・L得点比

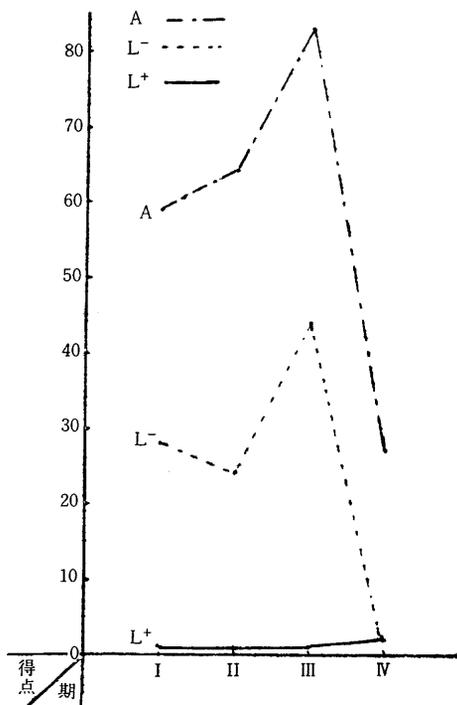


図2 各期別A・L得点

達成動機(A)ではやはり、III期を頂点としているがここでは、II期、I期、IV期の順となり、非生命尊重(L-)と同じくIV期において急激に下降しているのが特徴的である(図1)。

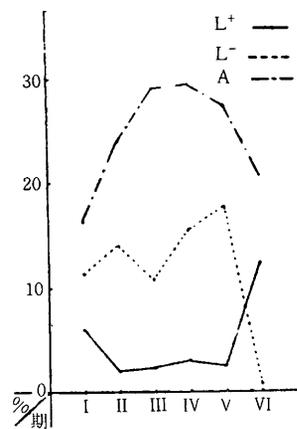


図3 国語、各期別A・L得点比

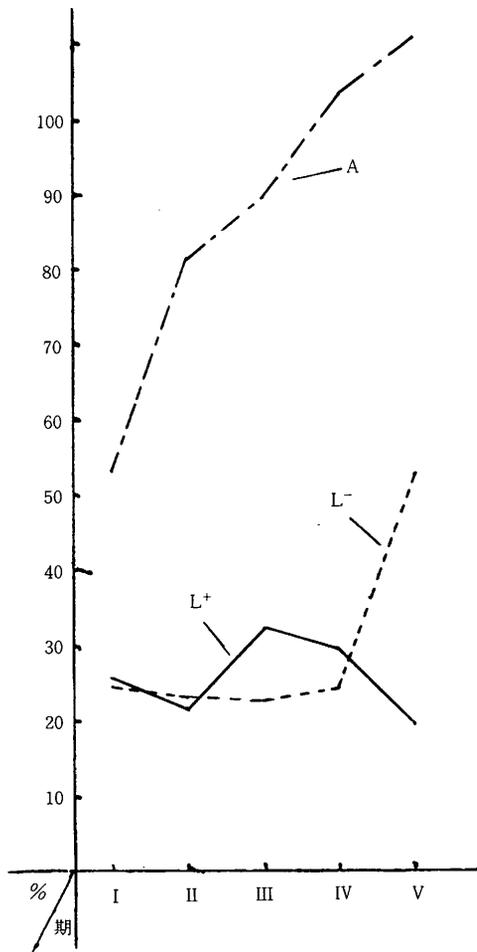


図4 修身各期別A・L得点比

表6 各期内容別頻度

内容 学年	期										
	N	M	E	S	I	P	H	C	T	U	
I 期	1	1(0.8)	2(1.7)	3(2.5)	12(9.9)	5(4.1)	6(5.0)	0	0	3(2.5)	0
	2	1(0.8)	0	4(3.3)	12(9.9)	7(5.8)	0	1(0.8)	0	1(0.8)	0
	3	7(5.8)	4(3.3)	4(3.3)	12(9.9)	4(3.3)	0	3(2.5)	0	0	0
	4	5(4.1)	5(4.1)	5(4.1)	10(8.3)	5(4.1)	2(1.7)	2(1.7)	0	0	0
	5	7(5.8)	5(4.1)	7(5.8)	10(8.3)	6(5.0)	2(1.7)	4(3.3)	0	1(0.8)	0
	6	7(5.8)	4(3.3)	3(2.5)	12(9.9)	3(2.5)	2(1.7)	2(1.7)	1(0.8)	1(0.8)	0
	計	28 121	20 121	26 121	68 121	30 121	12 121	12 121	1 121	6 121	0 121
	%	23.1	16.5	21.5	56.2	24.8	9.9	9.9	0.8	5.0	0
II 期	1	1(0.6)	3(1.8)	3(1.8)	14(8.6)	4(2.5)	12(7.4)	0	0	3(1.8)	0
	2	0	0	2(1.2)	16(9.8)	7(4.3)	5(3.1)	1(0.6)	0	1(0.6)	0
	3	5(3.1)	4(2.5)	1(0.6)	20(12.3)	4(2.5)	1(0.6)	3(1.8)	0	0	2(1.2)
	4	2(1.2)	4(2.5)	3(1.8)	16(9.8)	6(3.7)	3(1.8)	2(1.2)	0	0	2(1.2)
	5	8(4.9)	4(2.5)	6(3.7)	16(9.8)	6(3.7)	1(0.6)	4(2.5)	0	1(0.6)	1(0.6)
	6	4(2.5)	5(3.1)	2(1.2)	20(12.3)	3(1.8)	0	2(1.2)	0	1(0.6)	1(0.6)
	計	20 163	20 163	17 163	102 163	30 163	22 163	12 163	0 163	6 163	6 163
	%	12.3	12.3	10.4	62.6	18.4	13.5	7.4	0	3.7	3.7
III 期	1	4(2.6)	2(1.3)	3(2.0)	7(4.6)	7(4.6)	8(5.3)	0	0	9(6.0)	0
	2	8(5.3)	3(2.0)	1(0.7)	11(7.3)	3(2.0)	3(2.0)	0	0	2(1.3)	0
	3	13(8.6)	5(3.3)	1(0.7)	11(7.3)	4(2.6)	3(2.0)	0	0	2(1.3)	0
	4	14(9.3)	8(5.3)	6(4.0)	4(2.6)	5(3.3)	0	3(2.0)	0	0	0
	5	22(14.6)	7(4.6)	3(2.0)	4(2.6)	4(2.6)	0	1(0.7)	0	0	0
	6	16(10.6)	5(3.3)	1(0.7)	9(6.0)	3(2.0)	0	1(0.7)	0	1(0.7)	0
	計	77 151	30 151	15 151	46 151	26 151	14 151	5 151	0 151	14 151	0 151
	%	51.0	19.9	9.9	30.7	17.2	9.3	3.3	0	9.3	0
IV 期	1	1(0.8)	0	5(3.9)	7(5.3)	3(2.3)	7(5.3)	0	0	5(3.9)	1(0.8)
	2	0	0	1(0.8)	10(7.6)	4(3.0)	8(6.1)	0	0	2(1.5)	1(0.8)
	3	1(0.8)	0	0	5(3.9)	3(2.3)	6(4.5)	0	0	13(9.8)	0
	4	1(0.8)	0	4(3.0)	7(5.3)	5(3.9)	1(0.8)	0	0	8(6.1)	0
	5	0	0	1(0.8)	12(9.1)	3(2.3)	3(2.3)	0	0	12(9.1)	0
	6	1(0.8)	0	4(3.0)	14(10.6)	3(2.3)	1(0.8)	0	0	10(7.6)	0
	計	4 132	0 132	15 132	55 132	21 132	26 132	0 132	0 132	50 132	2 132
	%	3.0	0	11.4	41.7	16.0	19.7	0	0	37.9	1.5

図2において、非生命尊重(Lー)は図1とほぼ同じプロフィールを描いているが、達成動機(A)はⅢ期についてⅠ期が高くなっていることが特徴的である。次にそれを各期別に検討してみる。

(2) 各期ごとの特徴

1) Ⅰ期(M.44~S.6)

唱歌 Ⅰ期の場合、国語、修身でいうⅡ期の家族国家主義的色彩¹⁸⁾とⅢ期の大正デモクラシーの児童中心の教

近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に (IV)

表7 各学年内容別頻度

学年	内容	N	M	E	S	I	P	H	C	T	U
		1	I	1(1.1)	2(2.2)	3(3.3)	12(13.3)	5(5.6)	6(6.7)	0	0
	II	1(1.1)	3(3.3)	3(3.3)	14(15.6)	4(4.4)	12(13.3)	0	0	3(3.3)	0
	III	4(4.4)	2(2.2)	3(3.3)	7(7.8)	7(7.8)	8(8.9)	0	0	10(11.1)	0
	IV	1(1.1)	0	5(5.6)	7(7.8)	3(3.3)	7(7.8)	0	0	5(5.6)	1(1.1)
	計	$\frac{7}{90}$	$\frac{7}{90}$	$\frac{14}{90}$	$\frac{40}{90}$	$\frac{19}{90}$	$\frac{33}{90}$	$\frac{0}{90}$	$\frac{0}{90}$	$\frac{15}{90}$	$\frac{1}{90}$
	%	7.8	7.8	15.6	44.4	21.1	37.8	0	0	16.7	1.1
2	I	1(1.1)	0	4(4.4)	12(13.2)	7(7.7)	0	1(1.1)	0	1(1.1)	0
	II	0	0	2(2.2)	16(17.6)	7(7.7)	5(5.5)	1(1.1)	0	1(1.1)	0
	III	8(8.8)	3(3.3)	1(1.1)	11(12.1)	3(3.3)	3(3.3)	0	0	2(2.2)	0
	IV	0	0	1(1.1)	10(11.0)	4(4.4)	8(8.8)	0	0	2(2.2)	1(1.1)
	計	$\frac{9}{91}$	$\frac{3}{91}$	$\frac{8}{91}$	$\frac{49}{91}$	$\frac{21}{91}$	$\frac{16}{91}$	$\frac{2}{91}$	$\frac{0}{91}$	$\frac{6}{91}$	$\frac{1}{91}$
	%	9.9	3.3	8.8	53.8	23.1	17.6	2.2	0	6.6	1.1
3	I	7(7.4)	4(4.2)	4(4.2)	12(12.6)	4(4.2)	0	3(3.2)	0	0	0
	II	5(5.3)	4(4.2)	1(1.2)	20(21.1)	4(4.2)	1(1.2)	3(3.2)	0	0	2(2.1)
	III	13(13.7)	5(5.3)	1(1.2)	11(11.6)	4(4.2)	3(3.2)	0	0	2(2.1)	0
	IV	1(1.2)	0	0	5(5.3)	3(3.2)	6(6.3)	0	0	13(13.7)	0
	計	$\frac{26}{95}$	$\frac{13}{95}$	$\frac{6}{95}$	$\frac{48}{95}$	$\frac{15}{95}$	$\frac{10}{95}$	$\frac{6}{95}$	$\frac{0}{95}$	$\frac{15}{95}$	$\frac{2}{95}$
	%	27.4	13.7	6.3	50.5	15.8	10.5	6.3	0	15.8	2.1
4	I	5(5.3)	5(5.3)	5(5.3)	10(10.5)	5(5.3)	2(2.1)	2(2.1)	0	0	0
	II	2(2.1)	4(4.2)	3(3.2)	16(16.8)	6(6.3)	3(3.2)	2(2.1)	0	0	2(2.1)
	III	14(14.7)	8(8.4)	6(6.3)	4(4.2)	5(5.3)	0	3(3.2)	0	0	0
	IV	1(1.2)	0	4(4.2)	7(7.4)	5(5.3)	1(1.2)	0	0	8(8.4)	0
	計	$\frac{22}{95}$	$\frac{17}{95}$	$\frac{18}{95}$	$\frac{37}{95}$	$\frac{16}{95}$	$\frac{11}{95}$	$\frac{7}{95}$	$\frac{0}{95}$	$\frac{6}{95}$	$\frac{2}{95}$
	%	23.2	17.9	18.9	38.9	16.8	11.6	7.4	0	8.4	2.1
5	I	7(6.9)	5(5.0)	7(6.9)	10(9.9)	6(5.9)	2(2.0)	4(4.0)	0	1(1.0)	0
	II	8(7.9)	4(4.0)	6(5.9)	16(15.8)	6(5.9)	1(1.0)	4(4.0)	0	1(1.0)	1(1.0)
	III	22(21.8)	7(6.9)	3(3.0)	4(4.0)	4(4.0)	0	1(1.0)	0	0	0
	IV	0	0	1(1.0)	12(11.9)	3(3.0)	3(3.0)	0	0	12(11.9)	0
	計	$\frac{37}{101}$	$\frac{16}{101}$	$\frac{17}{101}$	$\frac{42}{101}$	$\frac{19}{101}$	$\frac{8}{101}$	$\frac{9}{101}$	$\frac{0}{101}$	$\frac{14}{101}$	$\frac{1}{101}$
	%	36.6	15.8	16.8	41.6	18.8	7.9	9.0	0	13.7	1.0
6	I	7(7.4)	4(4.2)	3(3.2)	12(11.9)	3(3.2)	2(2.1)	2(2.1)	0	1(1.2)	0
	II	4(4.2)	5(5.3)	2(2.1)	20(21.1)	3(3.2)	0	2(2.1)	0	1(1.2)	1(1.2)
	III	16(16.8)	5(5.3)	1(1.2)	9(9.5)	3(3.2)	0	1(1.2)	0	1(1.2)	0
	IV	1(1.2)	0	4(4.2)	14(14.7)	3(3.2)	1(1.2)	0	0	10(10.5)	0
	計	$\frac{18}{95}$	$\frac{14}{95}$	$\frac{10}{95}$	$\frac{55}{95}$	$\frac{12}{95}$	$\frac{3}{95}$	$\frac{5}{95}$	$\frac{0}{95}$	$\frac{13}{95}$	$\frac{1}{95}$
	%	18.9	14.7	10.5	57.9	12.6	3.2	5.3	0	13.7	1.2

育思想の時代背景を一気につらぬいたものとなっている。

I期は、日清・日露の两大戦を経て戦勝国日本としての大いに意気の上がる時代であった。また、I期教科書が作成されたのは、明治中期からの考えが続いているのであるが、ここで注目されるのは、言文一致体を一部とり入れられたことである。すなわち、非生命尊重(L-)を見ると全4期中、第2次大戦のまっただ中にあたるIII期(S.6~20)について2位を占め、同様に達成動機(A)をみると、やはり全4期中2位となっている。

得点別(表2,表3)にみても、非生命尊重(L-)は全4期中2位であり、達成動機(A)も全4期中2位となっている。また、学年別にみると非生命尊重は4,5年が最も高く、ついで6年・3年の順になっている。

次に内容面をみると、S(自然)が最も高く、ついでI(生活)、N(国家主義)の順となっている(表6,表7)。

S・Iは各期を通じ高い値を示していることが唱歌の特徴であるが、I期においてNがIII期について2位となっていることは、家族国家主義という時代社会的背景のあらわれであろう(表6,表7)。

たとえば、「出征兵士」は内容としてN,Mを含みL-2, A+2を示している。「行けや行けや、とく行け、我が子。老いたる父の望みは一つ。義勇の務御國に尽し、季子の拳我が家にあげよ」¹⁹⁾などがあげられる。

また、全期を通じE(教訓)が著しく高くH(歴史)も最も高くなっている。たとえば「つとめてやまず」は内容としてはE,N,Iを含みA+2を示している。

「額に汗して、人の道なり、務なり」があげられる。つまり、I期は修身的内容をもった曲が多くとりあげられているのが特徴となっている。

2) II期(S.7~15)

II期は、ファシズム的なものが強化され、国民の形成は臣民の育成へとすすみ、国家はいよいよ臨戦体制に入っていた。

この時期は、L-得点をみると、全4期中3位を示し、A得点では2位を示している(図1)。学年別ではL-は、4年・5年で最も高く、ついで6年・3年の順となっている(表2)。Aもやはり5年で最も高く、ついで4年・2年の順となっている(表4)。

内容をみると断然Sが高い数値を示し、ついでI(生活)、P(遊び)の順となっている(表6,表7)。ここでは全期中でS(自然)の数値が最も高いことが目立ち、

I期に比べP(遊び)が著しい上昇をみせている。またE(教訓)の減少も特徴となっている(表6,表7)。それは、「I期国定教科書の中から修身科的な内容の曲が削除され、このような内容の、あまりおもしろくない歌をうたっても効果は上がらない。こんな内容のものは修身科にゆずって唱歌に向けた題材を入れよう」²⁰⁾という意図が読みとれる。

つまり、教訓的内容を少なくし、自然・遊びという児童の日常生活を主とした構成となっている。たとえば、「金剛石」はN(国家主義)・E(教訓的内容)とともに、I(生活)を含み「金剛石もみががずば、珠のひかりはそはざらむ。人もまなびて後にこそ、まことの徳はあらはるれ。時計の針のたえまなくめぐるが如く、ときのまの、日かげをしみて勤みならば、如何なる業かならざらむ」²¹⁾となっている。また、「茶摘」はS(自然)、I(生活)を含んでいる。すなわち「夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂る。これに見えるは茶摘ぢゃないか。あかねだすきに菅の笠」²²⁾などと日常生活を主としたものになっている。また、「お手玉」はP(遊び)であり、「一二三四五つあつかひ、手先のはたらき一つに受けて、さらりと投げれば、みだれて落ちては、花もまう、花もやう」²³⁾など、いずれにしても楽しい歌が増えている。しかし、目次をみるとたしかに児童の日常生活や遊びに関するものが増え、修身的内容のものは減少しているが、「靖國神社」「入營を送る」「日本海海戦」など非生命尊重得点としてあらわされるものは、依然として残っている。

3) III期(S.16~20)

III期は、大平洋戦争勃発によって、「国民精神総動員運動」²⁴⁾がはじめられ、その影響で音楽教科書「国民歌」や「軍歌」等をうち出したものが多くなり、更にファシズムが強化されたのである。

L-得点をみると、全期中、断然1位を示している(図1)。学年別にみると、L-は5年に高い数値を示し、ついで4年・3年の順となっている(表3)。また、Aは6年に高い数値を示し、ついで4年・3年・5年となっている(表4)。

すなわちこの頃教育面においても国家主義的な動向にそって行なわれ、国民学校令が公布されたことに鑑み、国語・修身などを中心に、教科書も超国家主義・軍国主義強化の傾向を強くしていったものと思われる。

内容をみると、やはりN(国家主義)が最も高い数値

を示し、ついでS（自然）、M（ミリタリズム）の順となっている（表6、表7）。S（自然）が高いのは、音楽の特徴であり全期を通じ高いことを考えるとN（国家主義）、M（ミリタリズム）を中心に構成されているといえる。国民学校令の芸能科音楽の目的は、「芸能科音楽は歌曲を正しく唱歌し、音楽を鑑賞するの能力を養ひ国民的情懐を醇化するものとす」と定められた。芸能科指導の方針は、第1に技巧の指導に流れず、精神の訓練を重んずること。第2には、わが国芸能技能の特質を知らしめること。第3に、工夫創造力を養成することにあった²⁵⁾。また、内容については、国防に関するもの、児童の実生活に即したもの、古来の国民的、社会的行事を歌ったもの等を児童の心境に即するように内容構成されている。更に「歌唱の間に児童が自然に感化と影響を受け以て快活純美な性情を陶冶し、音楽教育の真義に透徹するようなものを採用することに力めたのである」また、「儀式唱歌に付ては、周到なる指導を為し敬虔の念を養ひ愛國の精神を昂揚するに力むべし」²⁶⁾となっている。

以上のように、このⅢ期教科書は軍国主義、国家主義に徹することを目的に内容構成されている。つまり、この時期は「皇国民の錬成」がメロディーにのせて行なわれたということである。たとえば「三勇士」にはM（ミリタリズム）、N（国家主義）が含まれ、「大君のため、國のため、わらってたった三勇士」となっている。また「無言のがいせん」にはN（国家主義）、M（ミリタリズム）、E（教訓的内容）が含まれ、「雲山萬里をかけめぐり、敵を破ったをござんが、今日は無言で歸られた」²⁷⁾となっている。

学年をみると、低学年（1～3年）までは「ユウヤケコヤケ」「オ正月」「春が来た」「春の小川」「村祭り」などの童謡や自然・年中行事などの歌が多いが、高学年（4～6年）になると神国日本、忠君愛国、国威宣揚的な超国家主義、軍国主義教材が多くなっている。

4) Ⅳ期（S. 22～26）

Ⅳ期は国語と同様に内容を一変し、新しい人間観、世界観に立脚しなければならぬという意図がみられる。

L-得点をみるとⅢ期から急激な落ち込みをみせ、ほとんどゼロの数値に近くなるのがわかる。A得点についてもL-と同様に全期を通じ急降下し、最も低い数値を示している（図2）。学年ではやはり4年が最も高く、ついで6年・5年の順となっている。

内容についてみるとS（自然）が最も高い数値を示し、

ついでT（文化的内容）、P（遊び）の順となっている。ここで目立つことは、各期で最も低い数値を示していたTが急上昇していることである。また同様にN（国家主義）、M（ミリタリズム）に関してはⅢ期は当然のことながらⅠ期、Ⅱ期ともに比較的高い数値を示していたが、Ⅳ期になると、Nは最も低い数値を示し、Mに関してはゼロとなっている（表6、表7）。

これらの理由として考えられることは、Ⅲ期までは児童の情操に国防意識、皇国の民としての意識をうえつけることに音楽教育の目標をおき、音楽教育を手段とし、音楽自体のもつ豊かな人間性を形成するという目的ではつかわれていなかったのである。それがⅣ期になると、音楽教育は情操教育であり、それは音楽美の理解、感得によって高い美的情操と豊かな人間性を養うことをその目標とすることに変化している。たとえば、「ひびくよ歌声」は内容をT（文化的内容）とし、「ひびくよ歌声、野べに、山に、ひびくよ。」²⁸⁾があげられる。

以上のように本研究では、国定Ⅰ期からⅣ期までの小学校音楽教科書を、達成動機・生命尊重という観点で分析し、あわせてその内容を検討し、各時代の音楽教育が何をねらいとして行なわれてきたのかを考察した。そして、当初の予想通り、音楽教育においても、国語、修身科と同様に、人間観・価値観といったものが強く国家の思想統制を受け、内容を大きく支配していることが確認された。それは、児童の情操という、より深い人間性を左右するところにまで国家の統制が加わっていたということである。

たしかに、全体的にみれば、S（自然）の内容が各期とも最も高く、ついでI（生活）、P（遊び）などのカテゴリーが平均して高い数値を示し、情操教育としての音楽教科書の特徴をあらわしてはいる。しかし、その根底には、「明治天皇御製」「鎌倉」「日本海海戦」「靖國神社」「水師營の會見」「金剛石」「廣瀬中佐」「入營を送る」などが、Ⅰ期からⅢ期を通じ揚げられ、遊び・自然などをあらわしたものは、「我は海の子」「四季の雨」だけであり、神国日本、皇国の民としての意識の強化、国家主義、軍国主義への傾斜が一貫して流れている。また、こうした傾向をもつ曲はおうおうにして、国語・修身と密接な関係をもっていることを考えあわせると、これらの時代の教育はひたすら国家主義・軍国主義に基づく皇国民錬成の教育であったことが明白な事実として理解でき

る。

音楽教育は、より豊かな人間性を養うところにその本質があるはずである。すなわち、音楽は人間の生きることの喜び、悲しみ、自由の謳歌を人々とともに分かち合うことができるすばらしさがあり、その根底に愛があるはずである。それゆえに音楽は、その時代、社会を敏感につかみとり、時代、社会とともに歩いていくものなのであるし、人々にうるおいをもたせてくれるものであろう。

そうした音楽を、ある目的への手段として子どもたちに与えつけてきた音楽教育の責任は重い。

なお、今後は国定期の歴史、戦後の教科書について同様の観点から分析検討し、実際にこの教科書で学んだ人々が、どのような人間観・価値観をもっているかを実証的に明らかにしていく予定である。そしてこれらの研究の中から人間尊重の教育・平和のための教育とは一体何かを問いつづけていきたい。

謝 辞

本研究を進めるに際して、貴重な資料また、御助言をいただきました川瀬八洲夫先生はじめ、多くの諸先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 橋口英俊, 三角 同, 鮎川成子, 今井啓子, 浦部陽子:「教科書と人格形成に関する基礎的研究(1)」その1~その4, 第19回日本教育心理学会総会発表論文集, p. 485~p. 495 (1977)
- 2) 橋口英俊, 三角 同, 鮎川成子, 今井啓子, 浦部陽子:「近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に, その1 国語について」東京家政大学研究紀要18(1), p. 59~68 (1978)
- 3) 三角 同, 橋口英俊, 鮎川成子, 今井啓子:「修身教科書にあらわれた理想的日本人像」東京家政大学研究紀要19(1), p. 51~60 (1979)
- 4) 今井啓子, 橋口英俊, 三角 同, 鮎川成子:「近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に(Ⅲ), その3 理科について」東京家政大学研究紀要19(1), (1979) p. 41~49
- 5) 唐沢富太郎:「教科書の歴史」創文社, 東京 (1956)
- 6) 海後宗臣, 仲 新:「近代日本教科書総説」解説編, 講談社, 東京 (1969)

- 7) McClelland, D. C, Atkinson, J. W, Clark, R. A. & Lawell, E. L.: The Achievement Motive. N. Y., Appleton Century (1953)
- 8) 橋口英俊他:前掲書, p. 61 (1978)
- 9) 海後宗臣, 仲 新:「日本教科書大系近代編」第25巻, 講談社, 東京, p. 635 (1975)
- 10) 唐沢富太郎:「教科書の歴史」, 創文社, 東京, (1956), p. 127.
- 11) 同 上
- 12) 山住正己:「唱歌教育成立過程の研究」, 東京大学出版会, 東京, p. 79~80 (1967)
- 13) 唐沢富太郎:前掲書, p. 129.
- 14) 東京芸術大学音楽取調掛研究班編:「音楽教育成立への軌跡」, 音楽之友社, 東京, p. 10 (1976)
- 15) 同 上 p. 7~8
- 16) 澤崎真彦:『尋常小学唱歌』へ, 「音楽教育の歴史」第2巻第2章, 音楽之友社, 東京, p. 56 (1983)
- 17) 同 上 p. 59, 註13), 1年, 明治44年5月8日, 2年, 明治44年6月28日, 3年, 明治45年3月30日, 4年, 大正元年12月15日, 5年, 大正2年5月29日, 6年, 大正3年6月18日
- 18) 唐沢富太郎:前掲書, p. 298~307
- 19) 第一期国定唱歌教科書, 第六学年用, 「六, 出征兵士」
- 20) 海後宗臣, 仲 新編:前掲書, p. 654...
- 21) 第二期国定唱歌教科書, 第五学年用, 「二, 金剛石・水は器」
- 22) 第二期国定唱歌教科書, 第三学年用, 「五, 茶摘」
- 23) 第二期国定唱歌教科書, 第四学年用, 「九, お手玉」
- 24) 国民教育研究所編:「近代日本教育史」, 草土文化, 東京, p. 191~192, (1973)
- 25) 海後宗臣, 仲 新編:前掲書, p. 654~655
- 26) 海後宗臣, 仲 新編前掲書, p. 655
- 27) 第三期国定唱歌教科書, 初等科音楽二, 「二十, 無言のがいせん」
- 28) 第四期国定唱歌教科書, 四年生の音楽, 「十二, ひびくよ歌声」
- 29) 本研究の一部は1977年, 第19回日本教育心理学会総会において発表した。